

に、又固く握らる、是れ長のおいとまなりしか、終に終に眠るが如く息引取られぬ、あゝ何たる事ぞ、もう一度お言葉なりとあれかしと、ぢつと辛棒しておからだをしかとお抱へ申し居りしが、何時迄立ちても、何時迄立ちても、何の甲斐もなし、あゝ終に事切れしか、ふみ子とおとくさんとは共に介抱しておそばに居りしが、他の兒等皆學校に行き居りし爲、呼びに行きしが間に合はず、餘り急の事とて親類の人々にも間に合はず、只茫として爲す事も分らず。

御病臥以來日増し經過よく、追々快方に向はれ、日一日とお元氣加はり、食事も進み、御自身も月變ればお店へ出られる様思はれ、自分も側の人も皆それこのみ心に樂み、日夜の看護を物ともせず、唯御全快の早からんこのみ祈りて御介抱申せしに其甲斐もなく、俄に餘病出て、かくも慘たらしく、大切の人を吾家より奪ひ去りしか、思へば人の命ほど果敢なきものはなし、かゝる事とは神ならで知る由もなく、お言ひ遺しの事も數々ありしならんに、又お尋ねする事も多々ありしに、思へば思へば凡夫の悲しさ、それもかなはず、唯無情の天を怨むのみ、二人の仲殊の外陸じく、杖とも柱ともお頼りに暮せしかば、今俄に一人取殘されし淋しさ、悲しさ、心やるせな

く、思ひ出ては歎きの種、あゝ我心、神ならねば知る人ぞなし、あゝ主人の如き人をおか  
くも早く命縮めんとは、神も佛もなきものか、餘りと云へば餘りにて、最早此世に何  
の樂みもなし、たゞ大勢の子供あり、自分一人の責任ゆゑ、子供の爲に生きながらへ  
せめて子等の成長を樂まんこ強いて心を勵せども、空飛ぶ鳥の片羽もがれて行く  
も歸るも得ならず、明け暮れ歎き悲めど何の甲斐やある、あゝ二十三年の間、日々お  
店へお勤の身なれば、朝の別れも人一倍心寂しく、いつも夕のお歸りを樂みに暮せ  
しが、今思へばかくも早くお別れして吾一人取殘されん爲なりしか、思へば思へば  
はかなきは人の命、一度無情の風吹きぬれば、朝日に消ゆる葉末の露、あゝ何につけ  
ても思ひ出ては涙の種、此心癒す術もなし、朝な夕なに御寫繪に向ひ、在りし昔を語  
りては泣き、思ひ出ては歎き、夜となく晝となく只うつらうつらと其日を送りぬ、あ  
ゝ此歎きいつか果つべき、いつか癒ゆべき、せめては夢になりとも語り合せたまへ  
かし、吾胸の中千萬の思あれども、心亂れてとても筆紙には盡し難し、あゝ悲しいか  
なあゝ淋しいかな。

此病床日誌は、主人全快後の思出の爲にもご看護中日々の事ども有りのまゝに書きつらねたものでありまして、素より人様の御目にかける積りで認めたものではありません。それゆゑ文章も後や先になり、措辭も誠に拙いのはお恥しい次第であります。(きやう附記)

附、病中の食餌

廿八日		廿七日		廿六日		廿五日		廿四日		三月廿三日	
玉重	前七時	玉重	前七時	玉重	朝	玉重	前七時	重湯	前七時	肉汁	前十時
子湯		二湯		二湯		二湯		二湯			
牛乳	九時	乳	九時	肉汁	九時	乳肉汁	九時	肉乳汁	十時	重湯	十二時
肉汁	十時過	肉汁	十時過	乳	十時過	玉重子湯	十二時	玉重子湯	十二時	牛乳	後三時
ソ重	十二時	ソ重	十二時	玉重	十二時	玉乳	後三時半	肉片	後六時	玉重湯	七時
ツブ湯		ツブ湯		子湯		子		汁栗			
乳	後二時	玉乳	後二時	玉牛	後四時	玉重湯	六時	牛乳	四時半	片玉牛	九時
		一		一乳		二				栗乳	
玉ソ	四時	玉ソ	四時	ソ重	六時			玉重	六時		
ツ子		ツ一		ツブ湯				子湯			
玉重	六時	玉重	六時	ソ重	九時			重乳	八時		
一湯		二湯		ツブ湯				湯			
牛乳	九時	玉牛	九時								
		乳									

五 日		四 日		三 日		二 日		四月 一日		卅 一日		卅 日		廿 九日	
玉重 二湯	前七時	玉重 二湯	前七時	玉カ (ウスキモノ) 二ユ	前七時	玉重 二湯	前七時	玉重 二湯	前七時	玉重 二湯	前七時	玉重 二湯	前七時	玉重 二湯	前七時
牛肉 汁	十時	牛肉 汁	十時	乳プ ウチン グ汁	九時過	牛肉 汁	十時	牛肉 汁	九時	肉汁	十時	乳汁	九時	肉玉 汁	十時
ソ玉カ ツ ユ	十二時	玉ソ重 ツ プ湯	十二時	玉カ (ウスキモノ) ソツ プ	十二時	玉重ソ ツ プ	十二時	玉重ソ ツ プ	十二時	ソ玉重 ツ プ湯	十二時	肉汁	十時	ソ重 ツ プ湯	十二時
牛肉 乳汁	後三時	牛乳	後三時	乳五 勻	後二時	カ牛 ステラ 乳	後二時	カ牛 ステラ 乳	後二時	乳汁	後三時	玉ソ ツ ニ	十二時	雑煮 ノ汁	後三時
玉カ ニユ	六時	ソ玉重 ツ プ湯	六時	玉重 二湯	六時	肉汁	四時	牛肉 汁	四時	肉ソ ツ 汁	四時	乳汁	後三時	肉汁	四時半
牛乳	九時					重玉 湯(少 シ米)	六時	玉ス ウ ブ	六時	玉ソ ツ プ	六時過	玉ソ ツ ニ	五時	ソ重 ツ プ湯	六時
						カ乳 ステラ	九時	乳汁	九時	乳汁	十時	玉重 二湯	七時	乳汁	九時
												乳汁	十時		

十三 日		十二 日		十一 日		十 日		九 日		八 日		七 日		六 日	
ト玉カ フ汁ユ	前七時	玉トカ フ汁ユ	前七時	ト玉カ フ汁ユ	前七時	麩カ ノ汁ユ	前七時	麩玉カ ノ汁ユ	前七時	麩玉カ ノ汁ユ	前七時	玉カ ニユ	前七時	玉重湯 ニ少	前七時半
カステラ 乳	十時	ビスケット 乳	九時	カステラ 乳	九時	肉汁	九時	プウディング 乳	九時	肉汁	九時	牛乳	九時	牛肉汁	十時
ビスケット 汁	十時半	肉汁	十時	ビスケット 汁	十時	牛乳	十時	カレノ切身 ユ	十二時	玉カカ ニレユ	十二時	プウディング 汁	十時	ト玉重湯 フ少	十二時半
野菜ノ煮 肴リユ	十二時	刺身	十二時	ツ玉カ クニユ	十二時	カレノ切身 ニユ	十二時	牛乳五勺	後三時	プウディング 汁	後三時	麩カ ノ汁ユ	十二時	プウディング 汁	後三時
カステラ 乳	後三時	牛乳	後三時	牛乳	後三時	カステラ 汁	後四時	肉汁	四時	玉トカ フ汁ユ	七時	カステラ 乳	後三時	牛乳	四時
プウディング 汁	四時	肉汁	四時	肉汁	四時	玉トカ フ汁ユ	六時	トカ フ汁ユ	七時	牛乳	九時	肉汁	四時	玉ト重湯 フ汁少	七時半
ジャガイモ 子ユ	六時	玉煮カ 肴ユ	六時	油目煮付 ユ	七時	カステラ 乳	九時	牛乳	九時			玉トカ フ汁ユ	六時	牛乳	九時
				乳	九時							牛乳	九時		

廿一日		廿日		十九日		十八日		十七日		十六日		十五日		十四日	
肴	前七時	玉	前七時	玉	前八時	玉	前七時	玉	前七時	玉	前七時	玉	前七時	玉	前七時
二	ユ	二	ユ	二	ユ	二	ユ	二	ユ	二	ユ	二	ユ	二	ユ
肉	九時	牛	八時	肉	十時	肉	後五時	牛	九時	牛	九時	牛	十二時	肉	十時
汁		乳		汁		汁		カステラ		カステラ		カステラ		ビスケット	
牛	十時	肉	十時	玉	十二時	肉	六時	肉	十時	肉	十時	肉	後二時半	ツ	十二時
乳		汁		サ	少	玉	子	汁		汁		汁		ク	ト
				カ	少	ナ	二							カ	フ
肴	十二時	玉	十二時	肉	後二時			刺	十二時	ツ	十二時	ビス	三時半	カ	後三時
子	ユ	カ	ユ	汁				カ	ユ	カ	ユ	ケット		ステ	
								身		リ		乳		ラ	
牛	後二時半	牛	後三時	乳	四時			カ	後二時半	カ	後三時	サ	六時	肉	四時
乳		乳						ス		ス		カ		汁	
								テ		テ		フ			
肉	三時半	肉	四時	玉	六時			肉	四時	肉	四時	牛	九時	ホ	六時
汁		汁		サ	少			汁		汁		乳		ウ	
				カ	少									レ	
				ナ	少									ン	
肴	六時	玉	六時					ツ	六時	ホ	六時			シ	
二	ユ	カ	ユ					ク		ウ				ン	
								リ		レ				ジ	
								ト		サ				ヨ	
牛	九時							フ	九時						
乳								汁							

廿九日		廿八日		廿七日		廿六日		廿五日		廿四日		廿三日		廿二日	
玉鮎粥 二	前七時	玉菜粥、 百合根 二少	前七時	玉肴粥 二	前七時半	菜鰈カ 一ユ	前七時	大鯛カ 根少ユ	前七時	サカ カ ナユ	前七時	小玉 肴一	前七時	玉肴カ 一ユ	前七時
カステラ 乳	九時	カステラ 乳	九時	カステラ 乳	九時	カステラ 乳	八時半	カステラ 乳	八時半	カステラ	九時	肉 汁	九時	カステラ 乳	九時
肉 汁	十時	百鰈粥 合	十二時	肉 汁	十時	肉 汁	十時	肉 汁	十時	肉 汁	十時	牛 乳	十時	肉 汁	十時
百肴粥 合	十二時	肉 ビスケット 汁	後三時	大肴粥 根	十二時	玉肴カ ユ	十二時	大肴カ 根ユ	十二時	大小カ 根鯛ユ	十二時	玉カカ レユ	十二時	サ肴カ シユ	十二時
カステラ 乳	後二時半	百肴粥 合	七時	カステラ 乳	後二時	カステラ 乳	後二時	カステラ	後二時	ビスケット 乳	後二時半	ビスケット 乳	後二時半	肉 汁	後二時半
肉 汁	三時半			肉 汁	三時半	肉 汁	四時	肉 汁	三時半	肉 ビスケット 汁	三時半	肉 カステラ 汁	三時半	カステラ 乳	三時半
玉肴粥 二	六時			肴、 百鰈 合根 菜	六時	玉鯛カ 少、大 根少	六時	菜鰈カ 少ユ	六時	大サカ ワ 根ラユ	六時半	大肴カ 根ユ	七時	玉肴カ 一ユ	六時
				牛 乳	八時	乳	九時	牛 乳	九時	カステラ 乳	九時	カステラ 乳	九時		

七		六		五		四		三		二		五月一日		卅	
e		e		e		e		e		e		e		e	
玉大粥 二根一	前八時	百玉粥 合、肴二一	前七時半	玉百粥 合根、肴一	前八時	玉百粥 合二根一	前八時	大百粥 合、玉二根	前七時	肴長粥、 玉二芋	前七時半	玉肴粥 二	前七時	玉百粥、 大合根二	前七時
牛 ビスケット 乳	九時	牛 ビスケット 乳	九時	牛 カステラ 乳	九時	牛 カステラ 乳	九時	牛 ビスケット 乳	九時	牛 ビスケット 乳	八時半	牛 ビスケット 乳	九時	牛 カステラ 乳	九時
肉 汁	十時	肉 汁	十時	肉 ビスケット 汁	十時	肉 汁	十時	肉 汁	十時	肉 汁	十時	肉 汁	十時	肉 汁	十時
長肴粥 芋 1½	十二時	百肴粥 合 1½	十二時半	菜百粥 合根 1½	十二時	百肴粥 合根 1½	十二時	百長粥、 合芋肴	十二時	肴大粥 玉根 1½	十二時	百肴粥 合 1½	十二時	大鯛粥 根 1½	十二時
牛 ビスケット 乳	後二時	牛 ビスケット 乳	後二時半	牛 カステラ 乳	後二時	牛 カステラ 乳	後二時	牛 カステラ 乳	後二時半	牛 カステラ 乳	後二時半	牛 乳	後三時	牛 カステラ 乳	後二時半
肉 汁	四時	肉 汁	三時半	肉 汁	四時	肉 汁	三時半	肉 汁	三時半	肉 汁	三時半	肉 汁	四時	肉 汁	三時半
百肴粥 合根 1½	六時半	百大粥 合根根肴 1½	六時	肴百粥 合根 1½	六時	長百粥 合肴芋 1½	六時	長百粥 合、玉 子根肴 1½	六時半	大肴粥、 百根合 1½	六時	小長粥 鯛芋 1½	六時半	菜肴粥 根 1½	六時半

十四 日	十三 日	十二 日	十一 日	十 日	九 日	八 日
粥肴、 菜、玉 二	粥肴、 玉百、 合肴	粥肴、 玉二、 大根合	粥肴、 長芋、 玉二	粥肴、 玉百、 二合	粥肴、 大芋、 百合二	粥肴、 玉百、 一合
前七時	前七時半	前七時半	前七時半	前七時半	前七時半	前八時
九時	九時	九時	九時	九時	九時	九時
カステラ	カステラ	カステラ	カステラ	カステラ	カステラ	ビスケット
肉汁	肉汁	肉汁	肉汁	肉汁	肉汁	肉汁
十時	十時	十時	十時	十時	十時過	十時
	粥肴、 大百、 根合	粥肴、 長百、 芋根合	粥肴、 長百、 芋根合	粥肴、 百肴、 菜合	粥肴、 長肴、 百芋根	粥肴、 大百、 根合
	後三時	後二時	後二時	後二時	後二時	二時
	カステラ	カステラ	カステラ	カステラ	カステラ	カステラ
	肉汁	肉汁	肉汁	肉汁	肉汁	肉汁
	四時	四時	四時	四時	四時過	四時
	粥肴、 百肴、 菜合	粥肴、 玉百、 二合肴	粥肴、 大百、 玉根合	粥肴、 百肴、 菜合	粥肴、 長百、 芋合肴	粥肴、 大百、 根合肴
	六時	五時半	六時	六時	六時	六時半
						ビスケット
						八時半

附記

一 1/3ハ茶碗ニ一杯ト一杯ノ三分ノ一ノ事  
 一 ソツブハカシワノスウブノ事  
 一 尚ホ毎日温度ヲ計リ居リシガ少シモ熱ナシ

一 1/3ハ一杯半ノ事  
 一 肉汁ハ牛肉ノ血

一 卵及玉ヲシテアルハ半熟ノ事  
 一 食事ハ一切自分ノ手ニテ作レリ

故人を追慕するの記



# 故人を追慕するの記

弟 西 川 芳 太 郎

各位の御芳志に對し

本稿を草するに先ち、私は謹んで、亡兄行狀逸事録編纂の、發起者編者諸彦並に御寄稿の各位に對し、貴重なる多數の時間と幾多の勞力を、本書完成に寄せられたる御芳志を謝し、併せて生前の行狀逸事が、公に而も永遠に、一本の記録となりて不朽に傳はることを得たる光榮を地下の靈に告げ、故人と遺族とに代り、茲に深く感謝の意を表す。

拙稿を靈前に捧ぐ

私は茲に、下記の拙稿を恭しく故人の靈前に捧げ、地下の英靈來り饗けられんことを冀ふのである。本稿は、私が胸に藏めて居た色んな故人の思出を、拙き筆で而も

不完全に草し、私の故人に對する切なき追慕の感を表したまで、これによりせめても、私が幼より故人から負うた、山よりも高く、海よりも深き鴻恩の萬一を謝し、且存命中、何等報いることの出来なかつた私の、不甲斐なさの幾分でも詫ぶることが出来たならば、何物にも優る私の仕合である。

私は本稿を左記の順序に草し、思出の内容を秩序立てるのである、そして記事は悉く私の記憶から採り、材料を他より仰がなんだこと、其記憶の正確を期するため相當の苦心をしたことを、茲に特筆する。

一 故人の誕生より學校修養時代

二 故人が鈴木商店に入られた動機と其當時の模様

三 入店後より結婚される迄

四 私が永き間特に世話になつて鈴木商店に入り辭する迄

五行狀逸事の色々

六 故人の嗜好

七 故人の娯樂

## 八 故人の日課

## 九 故人の健康

### 一 故人の誕生より學校修養時代

故人は、明治七年一月廿八日、郷里滋賀縣今津で呱呱の聲を揚げられたのである。尙上に一人の兄があつたが、生後間もなく夭折されたので、吾々一家の長男であつた。成長に伴れ、幼より他と異なる點多く、日常の起居動作智識等、多くの村童の間に一頭地を抜き、一般の村民からは敬意を表され、郷黨よりは其將來を矚目され、未來に對し大なる期待を繋けられたのであるから、父母は勿論、祖父母、叔父等の喜ばるること限りなく、特に其等の人よりの寵愛を専らにして居られたのであつた。當時交通不便、加ふるに片田舎であるに拘らず、よく祖父母の腰巾着となつて、名所舊蹟の遊歴、親戚知己の訪問に伴れられて行かれたので、幼時からなかなかの旅行通で、早くより都會の空氣を吸ひ、所謂見聞を廣くして居られたのである。又商業振は、吾々の家では、幼より接觸することの機會多く、且力めて其様に指導され、又自らも熱心であつた。ゆゑ、斯道の理解力と趣味の程度は、年に似合はぬものがあつたと承知

して居る、一面當時其起居動作は如何なるものであつたかを見るに、萬事が規則的で、食事の分量は一定し、間食の如き殆ど取らず、野外に於て村童と遊び廻り、衣類を汚し又は樹木其他を毀損したり、他人の迷惑になる様な所爲をすることが嫌で、好んで家に居て、學業の勉勵、家事の手傳、祖父母の用を便ずると云ふ風であつた、又父母其他長上の命は、唯々之を奉じて一度も抵抗すると云ふ様なことがなかつた、そして私は、幼時親達より、兄を見習へ、兄はかうであつた、あゝであつたと、幾度も諭されたことを覚えて居るから、今より考へて見ても、生來餘程温厚篤實で、且至孝至誠な人であつたと、思へば思ふ程此感を深くするのである。

故人が村の小學校に通ひ始められたのは、六歳の春からで、寺小屋式の少し發達した様なものであつて、教場は寺院を充て、佛の前で習はれたさうである、後學校らしき建物へ移つたが、學科は、吾々の小學校時代が、今日より數倍高等なるものを學んだと同じ様に、讀本などは、入學後三四年目には、既に日本史略の素讀、續いて日本外史、十八史略に及び、數學の如き、入學後直に、加減乗除を教へられたさうである、故人は入學してから、一層勉強家たる實を發揮し、試験前などには夜中夢中で起上り

無意識で學科の暗誦を試みたことが度々あつて、家人を驚したのみならず、却つて心配せしめた位で、今も其事が一つ話になつて残て居る程であるから、餘程熱心な學業精勵家で、至極眞面目な人であつたことが想見される。在學中は、郡長、知事などより褒賞を貰つたり、級中の總代として祝詞講演などをやられたことは、度々であつたと聞く、年十四歳にして小學中等科を了へ、直に入學試験に合格して、大津市縣立商業學校へ入學せられたのである。修學三ヶ年、十七歳にして卒業し、成績は二番であつた。當時同校の寄宿舎は三井寺奥の院の邊に在り、晝尙暗く、四邊寂莫、實に餘りの光景であるから、此時伴れて行かれた父(私等の父は至て子供に嚴格な人で、子供は難業苦學せねば立派な人になれぬと、大に其實行を強いた人であつた)は、日頃の言葉も打忘れ驚き入つて、伴れて歸らう、此様な所へ預けて歸るのは如何にも可愛さうである。幾度決心しかけたか知れぬと、後年其當時の狀況を思出しては、感慨無量の體で、吾々に語られたことを記憶して居るから、餘程悲慘な設備の下に、螢雪の功を積まれたと察する。同校修業中は、級中の最年少者で、而も學業の成績は異常の好成績を續け、特に珠算暗算など全校中一二を争ふ程得意であつたと記憶し

て居る、卒業後直に、東京高等商業學校を受験し、幸に入學することが出来たのである。當時叔父に伴れられ上京されたのであるが、この又叔父は、父以上に厳格な頑固な人で、且常に徹底した議論を吐く人であつた、始終口癖の様に、これからの若い者は大商人にならぬ様では駄目じや、大商人は世界を相手に商賣するものを云ふので、世界の金や物の取り遣りをする様でなければ、商賣人にならぬ方がました、田舎の商賣などは、畢竟近所の人達に、有無相通の便益を與へんがため仕方なくするので、その様な事で成功したとて、大きな顔は出来ぬ、どしどし毛唐と商賣せよと云ふ調子であつたと記憶する、愈故人が東京への旅立の間際、家族一同と別れの膳に就かれた時、故人を呼び付け此叔父の云はるゝには、文藏、東京へ行くのはたゞ單に此上の學問をする爲でない、大商人になる資格と、其呼吸を覺えに行くのであるからよく頭に入れ、夢にも忘れぬ様にせよ、この意味を以てせられたのである、側に此事を聞いて居られた母親などは、此様な小さい者が、今將に海山千里の遠方に旅立たんとするのに、何とかもつと外に言ひ様もありさうなものである、餘りの言葉でなからうかと、ぼろぼろ涙を溢されたさうである、かうして東京に行かれ、三學年の夏

十九歳になられた時、この叔父が、學問も結構であるが、此上は寧ろ實地の修業の方が肝要であらうと、父を説き付け、業半ばにして退學せしめ、故人が尙勉學の續行を懇請されたけれども、聞き納れず、一旦歸村を促されたのである、暫く宅に居られた當時、私は尋常二年生位と思ふが、故人は自分の居間兼書齋で、小學校へ通學して居る兄弟二三人に、毎日の學科の復習、翌日の豫習をさせて居られたが、覺えが悪いとか不熱心だと、非常に怒り、時には算盤で叩かれることもあつた、又或時は、他の兄弟が試験に褒賞を貰ひ、私は手を空しくして歸つた時など、其賞品を私に見せ、此様なもの貰へぬ様では男でないよ、顔色を變へて大に叱責されたことがあるのを記憶して居る程、子弟の教育には嚴重で熱心であつた、當時私は小學校での亂暴的運動家で、顔や體に生傷の絶え間がない程であつたが、此事は決して叱ると云ふ様なことがなかつた、これは今から思へば、其當時既に自分の經驗から、餘り温しく外へも出ずに居る様では、第一體育上不可であるから、少し度が過ぎてもよいから、やるだけやらず方がよからうと、語られて居たかとも考へられる、又故人が餘程の讀書家であつた證據には、當時讀まれた各種の書籍が、今も郷里に、大なる別製の書籍箱に

二杯充滿して居るものがあるのを見ても分る、又字を非常にやかましく云ふ人て暇があるご何時でも習字の練習をされた、習字帖が當時何冊もあつたことを覚えて居る、自然私にも常に字の稽古を喧しく言はれ、最近迄も字は大切である、決して自習を怠る様なことがあつてはならぬと、度々注意されたものであつた。

## 二故人が鈴木商店に入られた動機と其當時の模様

前に述べた大商人萬能説を吐かれた叔父が、當時商用で京阪地方を往來するご頻繁、自然各方面に色んな知己を持って居られた折柄、自己の發意で、しかも實務修業を必要とする理由で、無理に故人をして退學を餘儀なくせしめた關係上、早く適當なる貿易商へ就職せしむる必要があるので、非常な熱心を以て各方面に依頼中、當時最も懇意な間柄なる、大阪天王寺在蒼龍寺の僧侶で寺田某と云ふ人が、其知人の兵庫に居られた豊島と云ふ方に頼み、豊島氏が更に、同氏の知人、殊に貿易商方面に深き關係のある、當時神戸商業會議所の書記長をして居られた戸田と云ふ方に依頼されたが、恰もよし此戸田氏が、鈴木商店の故大主人に交際あり、此事を話された所、伴れて來て見いこの事であるので、故人は大急ぎで神戸に出て、直接故大主人

に面會、採用方願出られたのである、其時故大主人の曰はるゝには、自分の店では今迄學校出の人を使つたことがなく、君を雇へば初めてゝある、君の成績如何は將來にも關係を及ぼすことであり、又個人商店と云ふものは随分窮屈なもので、取別け學校出の人は、此苦に堪へ勝つ一大決心を要するのであるが、君はそれを成し遂げる忍耐力や確信があるかと、種々懇話があつたさうである、採否は何れ後日通知するこの事であつたから、一應其當時、次の兄が神戸三ノ宮に在る松宮と云ふ郷里の附近から出た貿易商に居られた關係上、其店へ引取り何分の沙汰を待たれたのである、此松宮と云ふ人は、無一物から小さなながらも貿易商迄漕付けた人だけあつてなかなか頑固一徹の人らしく、朝は粥の御馳走を出し、新聞は新聞社前の掲示板に出で居るから、讀みに行くが宜しいと云ふ風で、決して構ふ様なことはされなかつたから、よく故人は、奉公なるものゝ大體觀念は、此松宮商店數日間の滞在で了解することが出来たと言はれたものである、然し店からの返事が遅くなるので一旦歸村されたが、後間もなく採用の沙汰があつたので、愈一生の運命を開拓すべく必ず錦衣歸郷すべし、盟つて父老の期待に負かずと、鐵の如き硬き決心と、燃ゆるが如き

未來の希望を抱いて、男々しく郷關を後にされたのである、時に明治二十七年春の頃と記憶する、これが四十有七歳で終つた短き苦闘の生涯へ旅立れた最初の一步で、又死の神の手に抱かるゝ最後の瞬間迄、全身の力を鈴木商店の大に致された奇しき因縁の發端であつたのである。

### 三 入店後より結婚される迄

故人は鈴木商店入店後も、依然幼時と異らず至誠至孝で、老後の祖父母、父母、叔父等に孝養を勵むべく、日も尙足らざる有様であつた、暇ある毎に書信を國許に寄せ神戸の有様など手に取る如く通知し、又店の日々繁榮に赴く狀況や、自分が次第に主人の引立や先輩並に同僚諸氏の引廻により、向上する事情など、細大となく首を長くして待つて居る郷里の皆の耳に入れて喜ぶのを樂み、又珍しきもの親の好きさうなものとは時々送つて來られたので、當時田舎にて望み得べからざるものでも吾々は其時眼にし口にする事が出來たのである、且弟妹の學業獎勵のためには賞品の惠贈を缺かされたことなく、大に鞭撻されたのである、今から思つても、當時故人の全精神は、一方店の仕事に渾身の力を捧ぐると同時に、他方家名の發揚と、父

老への孝養や弟妹誘掖の外、何物もなかつた様であつたと心得る、たゞ今日でも察せらるゝのは、幼時より愛撫至らざるなかりし祖父と、故人の今日あるに與つて力のあつた叔父の間もなく他界されたことで、故人が此等の人に對し生前報いることの薄かつた恨は、必ず常に念頭より離されなかつたことであらうと思はるゝ一事である。

故人入店の當年、故大主人が御逝去になつた際の模様などは、巨細に報知せられ哀愁の意を表して居られたから、其當時年少の吾々でも、故人の書簡により大體の事は承知して居り、今も其記憶は深いのである、其内でも大主人御病氣中は、夜中何時御用があるかも知れぬと思つて、店の二階で幾夜も徹夜し、朝夕必ず御平癒を神佛に念じたこと書かれた一節は、特に私の頭に今も尙深い印象となつて残つて居る故人が結婚されたのは二十五歳で、神戸で擧式せられたのである。

前記松宮氏の知人、神戸市山口傳次氏の長女を娶られたので、今の未亡人其人である、始終同家を訪ね、結婚に付ての諸要件を調べ撰ばれたので、誠に好配偶を得たものと謂ふべく、故人の今日ある内助の功特筆すべきものが多々ある、琴瑟相和し

二男四女あり、何れも幼少であるから、逝きし故人の心残りや思ふだに涙の種である、後に遺された六人の子女の幸薄き身の上を思ふと、何時でも、なぜ天は至誠至孝の故人に對し、假すに今十年の齡を以てして呉れなかつたであらうかと、染々其無情を怨まざるを得ぬのである。

#### 四 私が永き間特に世話になつて鈴木商店に入り辭する迄

故人が結婚後より晩年までの鈴木商店生活、即ち最も奮勵努力された過去二十年間の事情は、私よりも一層大方諸氏の熟知せらるゝ所と思ふゆゑ省略し、後段更に筆硯を更め、家庭方面よりの故人に關する思出を記す所あるべきが、抑も私が本稿を草するに當り、特に緊張した氣分と、敬虔なる態度を以て筆を進めたのは本項である、何故なれば、私が誰よりも特に故人の世話になり、故人に教育せられた後、誰よりも特に心配や迷惑を掛けたるにも拘らず、誰よりも特に故人に對し報いることが薄くして永別したからである。

私が故人の厚き世話を受くる様になつた最初の振出は、義和團事變で世の騒々しい、明治三十四年の四月十三日、私が十四歳の春であつた、目的は勿論未來の大

商人たるべきことで、今から思へばよくあの様なことが考へられたものであると思へる程、空中樓閣的な野望を胸に藏して乗込んで來たものであつた、お恥しい話であるが、兄の世話になれば必ず大富豪となり、天下の富を掌中に握ることが出来る位の考を持つて居たのである、學校生活としては二十三歳まで、足掛け十ヶ年厄介になつたのである、故人の家に居り、故人の膝下で世話を受けたのは、右の長日月であるが、更に故人の關係ある鈴木商店に入れて貰ひ、私が辭し、次で故人が物故さるゝ昨年迄、色々厚き世話を受けたのであるから、前後通じて約二十二ヶ年間、吾子も及ばぬ程手鹽にかけて育てられ、男一正に仕込んで貰つたのであるから、海より深く山より高き鴻恩とは、故人より受けた厚意を云ふのであらうと信ずる、最初は大なる野望を持つて居たものゝ、さてなかなか譯が異ふことがあるから、これでは豫算と違ふと、それはそれは故人に對し濟まぬことの數々をしたものであつた、それにも拘らず、故人は別に怒もされず、根氣よく親にも優る面倒を見られた、その勞苦は今思ふだに涙のこぼれる程で、故人なればこそと考へらるゝ節が多々ある、殊に新婚間もなきことゝて、所謂蜜の如き甘き家庭の平和を破つたこともあつたと

思ふ、今から考ふれば、あの時あの様な事があつたのであるから、あの時一刀兩斷方向變換を命じ、故人の膝下を去るべき宣告を下し置かれたならば、よもや後年仕出した様な心配事はなかつたらうと、今も尙回らぬ悔を屢々繰返すのである、それから學校修業を終る迄は、色々の出來事もあり、悲喜交々至るの有様で、其間の苦心煩悶等は筆舌の能く盡す所にあらず、常人では到底出來ぬことで、自制力強く忍耐力に富む故人にして、始めて企及し得る業と信ずる、斯くして二十四歳になり、鈴木商店に入れて貰うたのであるが、それから艱險で、恰も小さな帆船が、冬季朔風の吹荒む日本海へ乗出た様なもので、危きこと限りなく、あれよあれよと見る間に暗礁に乗上げ、大方諸彦の知らるゝ如き理由に依り、店を辭するの止むなきに至つたのである、これが爲故人の健康に龜裂を生ぜしめる様な一大心痛を與へ、故人の永年築き上げられた功績は滅却する、實に慘澹たるものがあつたのである、如何なる寶を積んでも取返しのかぬ濟まぬことを、私は故人に對し敢てしたものと謂ふべく、後年故人の洋々たる後半世を、病のため奪うた事由を査問される様な事があれば、私は其事由には、錯雜した幾多の事情が伏在することがあつても、悉く之を排除

して、喜んで其責任の全部を負擔するのを辭するものでないことを茲に明言する。若し私にして故人と無關係であつて、故人の厚恩を蒙らずば、故人は順風に帆を揚げ、母艦たる店の噸數の増大すると共に愈々安全に、益々光輝ある洋上に安穩なる航海を樂まれ、目ざす彼岸に到達して、幸多き天壽を全うせられたことと深く確信する次第である、殊に私の最も慚愧に堪へぬのは、故人に與へた打撃の大なるにも拘らず、生前聊かの償すら出來なかつたこと、更に此事の實行を焦つた氣味があつて、却つて這次の財界大波瀾の渦中に捲込まれ、又亦死後の名聲を辱むるの止むを得ざるに至つたことである、愈々相濟まぬことゝして、如何にせば罪の赦を地下の靈に乞ひ得るか、此點日夜苦慮して居る次第である、恐らく温厚寛仁なる英靈は、粉骨瘁勵世界一の苦勞人となつて、必ず汚名を雪げと諭さるゝに相違ないと信ずる私も故人に對し罪の赦を乞ひ得る方法があるならば、それは如何なることでも敢行するを辭せぬ決心である。

### 五行狀逸事の色々

(一) 故人は前述の如く、幼より父母其他の長上に對し、一言も抵抗されたことなく

又其様な態度に出られたことがないのは有名で、唯々として之に應じ、不可と見れば其實施に手加減を加へられた位である、此特別なる人格は、近接者に一種言ふべからざる快感を與へ、他人が眞似ても出來ぬ美德として、今も尙親族間の追懷の資料となつて居るが、茲に唯一の例外としては、故人は幼より頭腦他より秀で大きくために頭を剃ることは、昔吾郷黨の一般風習であつたが、故人は之を非常に嫌はれ此一事だけは、如何に父母の命であつても、直に従はれないこともあつたさうで、晩年に、帽子類は別誂番外型で、入用の際手に入れるのに困難されたことは、多くの人の知る所である。

私は、幼時は別とし今日まで、店の事以外には、聲色を更め小言を云はれたことを覺えないし、又たとへ氣に入らぬことがあつても、それを外貌に現されたことを見たことがない、常に變らぬ温容と慈顔を以て接せられたので、年と共に此圓滿な性格が益々發露した様に考へる、其代り店の事では、随分深刻に叱責もされ顔色も變へて怒られたことがあつた、故人は此様な性格の人であつたから、一家内では夫婦相和し、小言一つなく、一切の家政の切廻しを夫人に委ねて干涉せず頗る家庭圓滿

であつた、小供等に向つても寛嚴宜しきを得、其教育も六ヶ敷注文なく、一切を夫人に託され、自らは其大綱を統べると云ふ風であつたから、それだけ小供等は妄に愛に溺るゝと云ふことなく、常に畏敬の念を持して、父命を遵奉すると云ふ有様で、他所の見る目も心地よきものがあつた、其他婢僕に對しても同様、一年三百六十五日同じ態度で、常に温顔を以て接せられたから、愈々永別の際などは、恰も慈母に別るゝ感があつたさて、何れも歎き悲んだと云ふことを聞いた。

(二) 故人は父母に對して至孝で、如何にせば孝養のほどが、思ふ様に出来るかと云ふことに腐心されたのみならず、又血縁の吾々兄弟姉妹、乃至夫人側の其れ等の人達に對しても、思遣りが深く、色々の面倒を見て厭はぬと云ふ風であつたから、吾々の心に觸れた感激の印象は深きものがある、其代り故人に在つては其煩や堪へ難く、心勞大なるものがあつたらうと思はれる、故人の如き資性の人にして始めて望み得べきところで、實に吾々は非常なる幸福を甘受して居たのである、又故人は他人に對しても親切で同情深く、其境遇の不幸な者ほど一層世話もし、何呉れと相談もされたのである、今日それがため社會的地位も向上して、幸福な生涯を送つて居る

人が多い、然し故人はそうした顔もされぬので、一層其徳を増した様である。

(三) 故人は自分の如何なる喜怒哀樂でも、容易に之を外面に現したり、人に言うたりすることをせぬのは、前に一寸述べたが、萬事は自分の胸の中に藏い込んで置くと云ふ風であつた、故に他人に對して嫌な感じを與ふることゝか、人の聞いて喜ばぬこと、話す必要のないことなどは絶対にせぬ人で、吾々はよく他から聞いて初めて知り、此様なことがあつたのですかと尋ねる折もあつたが、あればあつたと簡単に答へ、別に彼れ是れ説明がましいことはせぬであつた、又他人の批評とか、他人の悪口は決して、言葉にせぬ人で、時々吾々に注意さるゝ時、其例に出さるゝことがあるが、其場合には必ず亦其人の美點をも揚げると云ふ風に、頗る君子の面影があつた、又吾々に誨告を加へらるゝ場合でも、前に述べた様に、温言を以て諄々諭すと云ふ風で、晴天の霹靂大雷至ると云ふ様なことは絶対になかつた、自己の温和なる威容で包み、全人格を以て矯正すると云ふ流儀であつたから、よく叱られた後で却つて氣が晴々し、これでは人の親むのも無理はない、何時接しても氣の變らぬ、慈愛に富んだ氣高い人であると、吾兄ながら染々感ずることが多かつた。

(四) 故人は物事に忠實で、一些事と雖決して等閑に附せぬと云ふ風であつた、必ず事は目鼻をつけて、跡整理をせぬと氣が濟まぬと云ふ質で、又其日の仕事は其日に片付ける主義であつて、人にも之を強ひ、自分も極力之が勵行に力めるのが常であつた、自然家庭でも、物の未解決不整理なる點は如何なる方面にもなく、非常に心地よかつた、公務に對しても此風であつたらしく、非常に忠實であつたと信ずる、家に歸つても始終店の仕事に在つたらしく、翌日爲すべきことは、時々思出しては紙片に書付け置くとか、未決の事項を歸宅後處理されたことがあつたと聞く、又日曜など、一旦歸宅後思出した様に店に行つて、未整理の仕事を解決したり、商用の電信など、夜中何時でも電話で聞くとか、又は家に取寄せて適當な處理をされたことが再三あつたと聞く、又或日の如き、大風雨で出勤不能の事があつたさうだが、其場合でも既に出勤の準備を爲し、空ばかり眺めて天候の回復をもどかしがつて、待疲れられたこともあつたさうだから、其一斑を知ることが出来る。

(五) 故人は公私の別を明かにすること非常なもので、私が鈴木商店勤務中も、家庭では公用に關しては一切口にせられず、時に私に質問して注意さるゝことがある

も、自分は吾々の質問に對しては、差支なき範圍の答はさるゝが、直に話を他に轉ぜらるゝのが常であつたから、よく後日、あの位のことには話されてもよろしからうに大に參考になつて、如何ばかり助かつたかも知れぬと思ふたことが再三あつた。

(六) 故人は東京高商在學當時、各地に青年會の設立あり、地方青年の品性陶冶、人格の修養、思想の良化は、以て一郷の汚俗惡習を改め、惰眠を變じて進取敢爲の美風を涵養する所以なるを察し、率先郷黨に謀つて青年會を樹立し、幻燈機械等を入りしめて、隨時隨所に青年會の主義綱領を宣傳して、會の目的の貫徹に努力されたものである。後故人の神戸移住後も、同志並に後繼者大に之を徳とし、益々故人の素志遂行に盡力し、成績大に見るべきものがあつたのである。故人はかう云ふ方面には、特に力を盡されたのが常である。

(七) 故人は公共事業に盡すことが好きで、公益的事業の話をするれば、よく耳を傾け、金錢の寄附や物品の寄贈は、分相應にせられたものであつた。郷里の教育衛生土木等の公共設備や、神社佛閣に對する金品の寄贈は、心よく出捐され、多くの場合それが動機となりて、是等の事業が興つたのであるから、此點故人の功績は特筆に値す

るものがあつたと考へる、又其れだけ吾郷黨が一倍故人の徳に潤うたものとも云へる。

## 六 故人の嗜好

(一) 故人は食物に對して極めて淡泊で、あまり好悪がなかつた、但しあまり濃厚なるものは成るべく取らぬ方で、常に所謂アツサリした輕きものを好まれた、美食は大の禁物、夫人の手に成つた手料理を、甘い甘いささも甘さうに喰べ、味加減や其他に小言一つなかつた、魚肉と野菜が好物、獸肉は鶏肉が主で、稀に用ひらるゝ有様であつた、分量は飯も副食物も、共に何れか云へば小量で、腹八分目主義であつた、但し一の例外として、今でも思出さるゝのは、神戸寶屋の長崎料理ばかりで、此れには腹十二分目主義を發揮され、膳に上る皿は心地よく悉く平げらるゝのを見た、餘程氣に入つた所があつたと思はれる。

酒は嗜まず、晚酌をやられても五勺位、麥酒なら小瓶一本、それも晩年には絶対に用ひられなんだ、其代り茶は好きの様で、味のよいものを用ひられた、此れとても近年は形式的に取られた様に見受けた、果實は餘程好きらしく、食後必ず何か喰べら

るゝのが常であつた。

煙草は絶對の嗜好品と謂ふべく、常時身邊を離さず、色々の種類のもの交互に喫むのが習慣で、ポケットの煙草入れには、多種多様の煙草が詰められてあるのが常であつた、煙草の善惡を識別する力は恐れ入つたもので、永き月日の間大なる研究を積まれたものと察する、四時故人の指先から、紫煙の棚引くの見ぬことがなき位愛用され、殊に食後とか疲れた仕事の後に喫まれる容子は、眞に骨身に喰付くかの様に、さも甘さうであつた、自然私の土産は煙草に限つて居て、珍らしき甘さうな煙草と見れば、故人の愛喫を願ふべく必ず呈上したもので、故人も其都度、何を貰うたより結構であること大喜びであつた、今尙其懐みな面影が思出さるゝのである。

(二)衣類は和洋兩種とも、俗に云ふコサツパリしたのを好まれ、着飾ることは嫌ひであつた、殊に聊かでも垢付きたるものは、自他共に嫌ひで、此點度々注意を受けたことを覚えて居る、自然洋服類は、四季を通じ二三着のものを着倒すと云ふことがなく、始終新陳代謝、常に心地のよい新しきものを用ひられたから、故人着用濟の第二世品は、時々拜領の光榮に浴し、一面被服費の失費を省くことゝもなり又一方良

すぎると思ふ程の品を纏ふことが出来て、結構な有難いことであつた家の建方設備等は、建築其ものに趣味を持たれた爲か、なかなか意見があり、色々な研究をされたのを覺えて居る、特に風通しと日當りには注意を拂はれ、庭の作方や樹木の撰配置等には、一層眼があつた様に思はれる、故人は學生時代の印象の深きものがあつた爲か、私の現に住んで居る大津を非常に愛着され、老後休養の地は是非大津を撰み、幼時を追懐しつゝ、靜かに餘生を送りたいと、しみじみ言はれたことがある。

### 七故人の娛樂

娛樂としては殺生は禁物、生物を蓄ふのも嫌ひ、圍碁も好まず、謠曲長唄の類もやらず、況や淺酌低唱の粹事は頭から趣味がなかつた、たゞ書畫骨董は唯一無二の道樂で、煙草も喫まず酒も嗜まぬ亡き父親とは、此邊の事情はよく似て居る、多分若き時より此父親の感化力の大なるものがあつた爲であらう、一日の勞苦は此樂で慰すると云ふ風で、従つて鑑識眼は、相當あつたらしく聞く、其外は植木草木の類を弄ぶ位なもので、此等以外に何もない様に思ふ、即ち種類は少く、二三のものを徹底的に娛むと云ふ風で、故人の面目は此邊に躍如たるものがある。

運動は散歩位より外に、特殊の技に通じて耽ると云ふことはなかつた、此散歩も時間の餘裕がなき爲、時折娛まれた位で、一日の運動はたゞ朝夕、店への出勤退出が徒歩であつたことによりて得られたのである、旅行も好きらしかつたが、機會を得るに乏しかつた爲、永き年月の間、二三回より外實施されなかつた、故人自身はかう云ふ風であつたが、他人には運動の勵行と旅行の趣味を、大に鼓吹されたもので、殊に若き者の運動の趣味なく、ノラリクラリするのは見ても胸が悪くなると、始終言はれたのを記憶して居る、讀書は晩年に至りても、身に時間の餘裕なきに拘らず、暇あれば相當耽つて居られるのを目撃した、主に經濟文學方面のものと思はれた。

#### 八 故人の日課

故人日常の起居は、何事でも規則的で、萬事に時間の觀念と規律とを尊ばれ、不正確と不爲體は禁物として極力排斥されたのである、今故人の毎日の日課を摘記せば、即ち

朝は、四季を通じて六時前後には起床、直に含漱、神に事ふる、夕には、一日十五日は神燈を獻じ、供物を供へて禮拜、祖先の靈に對しては毎朝含漱後拜禮、佛前にて讀經

一卷、それより少憩の後朝食を取り、新聞を讀みたる後上厠、來客あれば應接、然らざれば直に更衣出勤準備を爲し、九時前後には雨天の外徒歩にて出勤された。

夕は、午後七時前後歸宅、入浴の後晚餐、居間に下り茶菓を喫し、其日の家庭の雜事を整理し、書信の受答を了へ、來客あれば之に接し、然らざれば書畫の整理か又は讀書に耽り、午後十時就床、之が毎日の日課で缺かされたことがなかつた、日曜日は午後三時頃歸宅、書畫の手入れ鑑賞、庭木をいじるときか散歩訪問等に費された、又よく書畫屋を招き、夜更くるまで談ぜられた、時々店の未決書類を持歸り、別室で人を遠ざけ、専心其整理に没頭されることのあつたことも聞いた。

又交際上若くは店の職務上宴會に出席されても、必ず午後十時迄には歸宅され、それより遅れる様なことは、特別の接待を要する場合の外、絶對になかつたさうである。

### 九故人の健康

故人の健康は稀に見る佳良な方で、幼より醫藥を用ひたことがないのを誇とせられた程であつたし、又實際無病息災で、それに消極的攝生も亦大に效果あり、少々

無理をされても別に健康上影響がなかつた、徴兵検査も眼が悪いだけで免役となられたのである、私も永年故人の家に寄寓して居たが、病と云へば風邪で、此病に罹られた際などは、醫藥の代に熱風呂療法を試み、直に回復された程であつた、此度の病氣は、生來初めての病氣らしき病氣で、而して最後の致命的疾患であつたのである、尤も此病に罹られたと思ふのは、臥床さるゝ二三年前の様で、當時から常に胃に故障あるらしく、便通も以前の如くてなく、變な工合であると言はれ、専ら食物養生や飲酒の全廢を試み、傍ら便秘を療する種々の手段を講ぜられたが、依然として效果なく、疾患は矢張固有の經過を續けて居たのである、此度は運動不足の結果ならんとして、自らも進んで實行され、吾々も亦大に其事の厲行を勧誘したもので、登山や郊外遠足は、此病に對する唯一の治療法として、日曜日などには大に實施されたさうであるが、矢張效驗なく、依然として内臓の故障は快癒する徵候なく、よき目を見せなかつた、さりとして病勢大に昂進すると云ふ様でもなかつたのであるから、如何にせばよきか、對應策に惑はれたのである、之が若し普通の人であるならば、直に醫師の診察を請はるゝのであるが、何分生れて藥の味を知らず、病の何物たるや解せ

られぬ程、頑丈な健康を持つて居られたのであるから、其中癒るゝとて打捨て、顧みられなかつたのである。今から詮なきも過去を顧みれば、此度の死病の芽は既に此時に萌して居たのである。と斷言する、萬事に注意深く、至極綿密なる故人にして、此時此點に着意されず、盛に反對療法を試み、吾々亦輕々に、素人考を以て、百方非治療的養生を畏敬すべき此大恩人に勧めたのは、何と云ふ不用意な重大過失であつたであらうか、故人に在つては、此過失は千慮の一失とも云へば云へるが、吾々に取つては、正に重大なる責任問題で、罪萬死に値するのである。然し靜に考ふれば、故人の此一失も、吾々の輕率なる振舞も、一に故人の平素の健康状態が、餘りに佳良であつたことに原因するので、故人に在つては、餘りに自己の健康に自信があり過ぎ、吾々は吾々で、餘りに故人の平素の立派なる健康に倚賴し過ぎた事實があつたと告白する、もし當時直に名醫の診斷を受けられ、相當靜養せられたならば、旬日ならずして回復され、根治出來たかも知れぬ、誠に僅な注意の足らざりしたため、千載の悔を貽したのである。此受診の件は故人へ進言する人もあり、吾々亦其意を以てしたこともあるが、元々既に述べた如く、故人の佳良なる健康を極度に盲信して居たため、遂

に臥床の時まで無理にも實現を請ふことを敢てしなかつたのは、如何にも遺憾に堪へない、申譯のない次第である、愈々床に就かれ、神戸の醫師二名の診察を受けられたが尙大事の上の大事を取るため、店よりは特に故人に勸むるに京都大家の招聘を以てせられ、家族の人達や吾々も亦大に其可なるを力説したが、故人はたいした病でなく、且病勢も日増に快方に向ひつつあり、間もなく回復するであらうから現在の醫師で十分であるとして、折角の店の厚意を受納されなかつたのである。

又追々病勢減退した様なものゝ、一步一步他界の日の近づきつゝあつた五月に入りては、全快の日近きに在りとして、各方面へ回復祝の印を配付する支度が完成して居り、且何呉れとなく其指圖をされたさうで、之を見ても如何に故人に、此度の病氣に打勝つことが出来たのは、全く日頃の壯健なる體力と、自信ある健康の賜であつたこと、大なる喜と誇のあつたかゝ想見さるゝのである、然るに突如、十四日正午より急變あり、翌十五日の同時刻に忽焉として幽明境を異にせらるゝに至つたので、今日に至つても萬事猶ほ夢の如き心地がする、まして當時に在つては、如何にしても故人の死を信ずることが出来なかつたのである、日頃の健康状態に大安心をし

て寸毫も感はず、忽焉として逝かれたそれよりも、尙一層憊ばれるのは故人の心根で、之を思ふと正に斷腸の思がして、一種名狀すべからざる悲痛の感慨に打たるゝのである、況や吾々よりも尙一層恨の深い未亡人や、慈父に先立たれた遺兒、殊に生み落すなり母としての數々のいつくしみを加へても尙足らずと爲し、千々に心を碎いて、頭に霜を戴く今日迄、朝な夕な思を故人の上に馳せ、幸多かれと祈られた甲斐もなく、又せめてもと思うた盡せぬ此世の名残すら惜む違もなく、至孝な最愛の吾兒に先立だれ、寂然として淋しき餘世を今吾郷里に養ひつゝある吾母の老の身を思ふと、何事も涙の種で、最早これ以上筆を運ばす力の失せたるを覺えるのである、何故人生はこの様に、不合理な果敢ないものであるのであらうか、噫。

(大正十年一月記)

